

# 1. 自己評価及び外部評価結果

**【事業所概要(事業所記入)】**

事業所番号	2970200230		
法人名	社会福祉法人 甘樫会		
事業所名	社会福祉法人 甘樫会 あまがし苑高田		
所在地	奈良県大和高田市神楽3丁目11番13号		
自己評価作成日	平成29年4月15日	評価結果市町村受理日	

事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/29/index.php?action_kouyou_detail_2016_022_kani=true&amp;JigyosyoCd=2970200230-00&amp;PrefCd=29&amp;Versi">www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/29/index.php?action_kouyou_detail_2016_022_kani=true&amp;JigyosyoCd=2970200230-00&amp;PrefCd=29&amp;Versi</a>
----------	--

**【評価機関概要(評価機関記入)】**

評価機関名	特定非営利活動法人 Nネット
所在地	奈良市登大路町36番地 大和ビル3階
訪問調査日	平成29年4月26日

**【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】**

食事の栄養バランスについては、管理栄養士に相談し、カロリーや塩分・糖分・脂肪分などの摂取過多のないように管理している。  
 日頃の健康管理も含め身体に異常が発生した時は、24時間体制で往診可能な医師に主治医となって頂いており、電話での相談往診及び緊急時を含め他の病院への紹介など早急な対応が可能である。  
 菜園では、利用者様と一緒に野菜作りをしている。植付け・水やり・収穫・調理をして楽しんで頂いている。毎月第1金曜日には、事業所研修(勉強会)の取り組みを実施している。毎月季節を感じられるよう壁飾りやレイアウトの変更を行っている。

**【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】**

事業所は平成14年に2階にグループホームを開設し、その後1階にデイサービス、隣接して特別養護老人ホームを開設している。法人の理念である「安心快護」は事業所の姿勢を的確に表しており、職員にもその理念は浸透している。管理者は、職員の意見をよく受け止めリーダーシップを発揮し、職場の人間関係は良好である。職員の大半が常勤職員であり、毎日リーダーを交代で担当する仕組みを作り、仕事に対する責任感と協働の精神を養っている。また利用者の思いを傾聴し、日常の支援に反映させることに努めている。利用者が適切な介護を受け、その人らしく安心して暮らせるホームを目指す施設である。

**サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) 項目 1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します**

項目	取り組みの成果 該当するものに印	項目	取り組みの成果 該当するものに印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

## 自己評価および外部評価結果

セル内の改行は、(Alt+)- + (Enter+)-です。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>理念に基づく運営</b>					
1	(1)	理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	事業所独自の理念である「安心快護」に加え地域密着型サービスとして理念を追加。住み慣れた地域や馴染みのある人との関係を大切にしている。	法人の初代理事長が作った理念「安心快護」は、明確な表現で憶えやすく法人系列の事業所で働く職員に浸透している。朝礼時に唱和するなど常に意識付けしている。	地域に密着した理念も作られているが、簡潔で理解しやすく表現し、地域密着型サービスの意義を家族や職員へ、改めて周知が必要と思われる。
2	(2)	事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自身が地域の一員として日常的に交流している	日常の挨拶や避難訓練を実施している。地元の総代や民生児童委員には毎月苑だよりをわたしている。地域の祭りや花見に参加。	自治会に加入し、地域の祭りや避難訓練に参加しているが、商業地に立地している事もあり近隣との日常的な交流は少ない。中学高校生の職場体験や職場実習などを受け入れ、地域への還元を図っている。	
3		事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	ホーム機能を入所者のケアに配慮しつつ、地域に開放している。認知症の理解や関わり方についての相談・応答、家族やボランティア等の見学や研修などの受入等。		
4	(3)	運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2ヶ月に1回、運営推進会議を行なった際は、神楽の総代・民生委員及び介護保険課の職員の方に行事などの写真を取り入れながら活動を報告。総代を中心に色々な意見を伺った。地域住民と話し合いを交えながら、協力的体制を築きサービス向上に活かしている。	2ヶ月に1回グループホーム、他併設事業所と合同で運営推進会議を開催している。自治会長、地域包括支援センター職員、民生委員、家族などの参加があり、現状報告や意見交換を行っている。	運営推進会議に家族の参加を呼びかけ多くの家族からの意見や要望を積極的に聴ける会議となるよう工夫が望まれる。また、家族に解りやすい議事録を作成し送付したり、関心のある事柄についての勉強会と組み合わせて、会議を開催するなど家族の参加を促す取り組みを期待する。
5	(4)	市町村との連携 市町村担当者や日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	非定期ではあるが、市役所を訪れている。また、地域包括や介護保険課の方から入所させたい利用者がおられた場合等、空き状況の確認や入所の相談を頂いている。また、空きが出来たときには、誰か紹介して頂くようお願いしている。	市役所の中に地域包括支援センターもあり、空き状況や入居相談など双方を訪れ話し合いをしている。運営推進会議では「あまがし苑だより」を毎回手渡しして、事業所の情報を伝え関係を深めている。	
6	(5)	身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	全体会議やスタッフ会議で勉強会を設け、職員全員に理解させている。	全体会議後の勉強会で身体拘束をしないケアについて、ビデオを使い研修を行っている。特に言葉による拘束に重点をおき、スタッフ会議では利用者個々に合わせた言葉かけや男性利用者への言葉かけなどの話し合いが行われている。外出願望の強い利用者には一緒に出かけたり、買い物に行くなど気分転換を図るように支援している。	
7		虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	全体会議やスタッフ会議で勉強会を実施。朝礼・終礼でも話し合いを行っている。身体だけでなく、言葉の暴力も無いよう常に注意を払っている。入浴時や更衣時は身体チェックを行い、傷やあざが出来ていないか確認、異常があれば主治医に報告している		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	全体会議やスタッフ会議などで勉強会を設け、職員全員に理解させている。		
9		契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入所の際は契約書・重要事項説明書を中心に、特にトラブルになりそうな項目についてはあらかじめ十分に説明を行い納得して頂いている。入所後に発生した利用者や家族の疑問や不安なことについても、十分話し合いを行っている。		
10	(6)	運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者には日頃から伺っている。家族に関しては面会や面談時に意見をお伺いしている。その際、要望があれば職員同士で話し合い、その後管理者に報告している。必要に応じて会議で話し合いを行っている。また施設に話しにくい場合は地域包括支援センターへの相談も可能と説明している。	家族の意見や要望は面会や交流会の時に直接聴くようにしている。また、会えない家族からは電話連絡で聴くようにしている。家族からのアドバイスで、職員は明るい雰囲気づくりを心がけ、元気に挨拶するように努めている。	
11	(7)	運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	代表者や管理者は、全体会議・スタッフ会議・個人面談で意見交換を行い、運営に反映させている。	毎月の全体会議の後、各グループに別れスタッフ会議を行っている。職員は毎日交代でリーダーを務め、責任感を養うと共に声を掛け合い、なんでも言える関係を築いている。管理者は職員の意見を受け止める姿勢を常にもっており、面談して相談を受けることもある。	
12		就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	介護職の処遇改善手当の交付をはじめ、業務態度や内容を見極め責任のある職務につけている。また資格試験の紹介や斡旋、研修などの参加を促している。また家族等の急な病気などで休職や勤務変更などに対する要望も受け入れている。		
13		職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	毎月の全体会議で計画的にOJTを実施している。入社後3年以上経過したスタッフには認知症実践者研修の参加や主任や中堅スタッフには社外研修に参加させている。また、事業所に紹介があった研修は事務所のカウンターに掲示し社員全員に知らしめている。		
14		同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	全国グループホーム協会の奈良県支部に加入し、同業者の懇親に努めている。またお互いに協力しながら、活動を通じてサービスの質を向上させていく取り組みも行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	過去から現在に至るまでの経緯・原因を把握し、利用者とコミュニケーションを取りながら本人に寄り添った支援をさせて頂いている。入所1週間は、センター方式の24時間シートを活用している。		
16		初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	施設の説明を伺いに来苑されたときやケアマネージャー等が家族を訪問し、困っている事や不安、要望を聞き出し、対応について細かく説明を行い、安心・納得して頂いている。		
17		初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	面談などで事前に知り得た情報を介護スタッフ等の参加するカンファレンスで話し合い、介護保険以外のサービスの利用も検討している。		
18		本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	本人ができる事はして頂いている。利用者の特技や趣味をレクリエーションに取り入れ利用者から調理・園芸・習字などを教えてもらう機会を設けている。		
19		本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	電話などの連絡を密にし、家族の気がかりな事・意見・希望などを職員に気軽に相談してもらえるようにし、また面会時に日頃の様子をお伝えしている。		
20	(8)	馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	初詣は、地域の天神社に参拝して頂いた。交流会では、御家族と一緒に苑であまがしカフェに参加して頂いた。決められた面会時間以外でも、御家族や知人に気軽に訪問して頂いている。	家族と外食や墓参り、孫の結婚式への出席など馴染みの人達との関係継続を支援している。毎年行っている交流会は、敬老祭と位置づけ利用者と家族の交流に力を注いでいる。時には遠方から来られる家族にグループホームでの宿泊の便宜を図ることもある。	
21		利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	毎日レクリエーションを行い、利用者同士と一緒に楽しめる環境を作っている。利用者のADLや利用者同士の相性を把握し、フロアの席についても配慮している。		
22		関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	継続的な関わりを必要とする利用者に対しては、同事業所居宅介護支援のケアマネージャーに、継続を委託して、病院や退院後の施設の斡旋・紹介を行っている。また、過去の実績として一度退所された利用者を約2年後に再入所して頂いた。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日常会話の中から利用者の希望・要望に気づき、本人らしく生活が送れるよう努めている。朝礼・終礼又は会議にて気づきがあれば話し合い、本人の思いに寄り添えるよう支援している。	日常的にいつでも、どこでも利用者に寄り添い思いを汲み取るように努めている。利用開始1年後に家族と面談を行い、改めて意向や思いを確認しあっている。入居後利用者が穏やかになったと家族から喜びの声を聞くことが多い。朝礼、終礼、会議時に話し合われた気づきの情報を業務日誌に記録している。	
24		これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入所時には御家族の方・利用者にお伺いしている。他施設からのサマリー等で情報を得て、把握に努めている。		
25		暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	利用者ひとりひとりの残存機能に着目し、できることはもちろん、できそうなことにも声掛け・見守り介助を行っている。		
26	(10)	チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	利用者・家族のニーズを主に介護計画に反映している。月1回モニタリングを実施している。利用者・家族の思いに寄り添った介護計画の作成に努めている。課題等あれば日々または、会議で話し合いを行い対応している。	アセスメントシート、入居後の職員の気づき、困っていることなど全てを拾い上げケアマネジャーと主任が介護計画を作成している。月1回モニタリングを行い、6か月毎に見直しをしている。利用者ごとに担当職員が決まっている。	
27		個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	利用者の日々の変化・気づきを個別に記録。職員間で朝礼・終礼で申し送り随時話し合い対応している。		
28		一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	外出・外泊・旅行・希望病院(歯医者等)への受診への支援を行っている。また、利用者に変化などあれば、苑の主治医と相談して他の医療機関への受診対応を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	警察、消防、民生員やボランティアの方の協力を得て、安全な生活が送れるように支援している。		
30	(11)	かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	月～金(随時)苑のかかりつけ主治医の往診がある。かかりつけ主治医以外に、個々のかかりつけ医・歯科・眼科・皮膚科受診の支援も行っている。また、御家族にも協力して頂いている。	月曜日から金曜日まで内科の協力医の訪問診療があり、月2回受診している。歯科は近くの歯科医院を受診している。眼科、皮膚科、これまでのかかりつけ医などへの受診は家族同行が原則であるが、家族が行けない時には職員が付添い通院支援をしている。併設する同法人が運営する事業所の看護師に相談することができる。	
31		看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	吉川診療所の院長と看護師が休診日以外、月～金(随時)往診に来た際に、健康状態を伝え管理してもらっている。デイサービス・特養の看護師にも相談し、協力も得ている。		
32		入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院の際には、情報や介護サマリーを提供している。またお見舞いの際には、担当看護師や相談員に病状の経過や退院後のケアについて相談している。		
33	(12)	重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域との関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	家族(本人)に希望をきいた上で、主治医を交え施設として出来る事・出来ないことを説明、医師のバックアップできる内容を確認し、終末期にむけ施設の方針や主治医の協力の内容を説明し支援している。	重度化に関して家族には早い段階で説明を行っている。重度化し看取りケアが必要となった時点で、医師は再度家族の意思を確認し、同意書を交わしたうえで看取りの体制に入るが、この2年間に看取った方はいない。	
34		急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	OJTによる応急手当やマニュアルに沿った対応を年1回行っている。昨年度は救急救命の講習会を消防にお願いし開催した。		
35	(13)	災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	防災マニュアルの設置。避難場所、変更の為、経路・場所の確認実施。また、デイ・特養の職員と連携をとって協力体制を築いている。避難場所として、苑の第2駐車場を設置。自治会の消防団との連携を図っている。	年2回昼夜を想定し、併設の特別養護老人ホーム、デイサービスの職員と連携をとって避難訓練を実施している。グループホームは2階にあるため特養への通路を新たに避難通路に加え、避難所も確保している。自治会消防団にも働きかけているが、共に訓練するまでには至っていない。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
36	(14)	一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	会議の勉強会では接遇について勉強会を実施。言葉掛けには特に気を付けている。利用者を一人の年長者として敬い尊重できるよう努めている。	朝礼や終礼時、勉強会などで声かけについて注意を促している。入浴時希望があれば同性介助を心掛けている。	
37		利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	利用者とのコミュニケーションの中で思いを聞き出している。また、日常生活において職員は利用者の言動や行動等から思いや希望に気付けるような環境作りに努めている。		
38		日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	利用者のペースを最優先に考えながら自分の生活を楽しんで頂けるように支援している。利用者の要望によっては、個別レクリエーションを実施。		
39		身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	毎日、整髪の声掛け援助を行なっている。化粧が好きな利用者には、外出の際に化粧をして頂いている。外出・入浴時の着替えの際はお好みの服と一緒に準備している。散髪も利用者自身の希望を聞いている。		
40	(15)	食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	嗜好調査を実施。利用者に合わせて食事形態、盛り付けを工夫している。(咀嚼・嚥下、体調にも配慮している)菜園で採れた野菜を使って調理している。食事の片付けもできる方と行っている。	食事は、1階の厨房で調理した主菜と、職員が作ったご飯と味噌汁を提供している。利用者から聴いた食べたい物の希望を厨房職員との話し合いで伝えている。職員もさりげなく介助をしながら共に食卓を囲み食事を楽しんでいる。月に1度行事に合わせた料理を利用者と手作りし楽しんでいる。外食は多くはないが、全員参加を目指し日程を工夫しながら行っている。	
41		栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	毎食時、午前・午後、入浴後は水分補給を行っている。食事・水分摂取のチェックを行い、摂取状況の把握を行っている。飲水量の少ない利用者には決められた時間以外にも提供、摂取カロリーが低い利用者には栄養補助食品を提供している。		
42		口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、総義歯の方には義歯洗浄・うがいの声掛け、自身の歯が残っている利用者には、仕上げ磨きのケアを実施。夜間に義歯洗浄剤による消毒・洗浄を行っている。定期的に歯医者へ通院しブラーク除去を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	利用者一人一人の排泄パターンを把握し、排泄パターンに応じたトイレ誘導を行っている。できるだけオムツを使用しないようにしている。居室にポータブルトイレを設置し、自立に向けた支援を行っている。	各利用者の排泄パターンを把握し、適切なトイレ誘導を行うことで、昼間オムツ使用者はなく、布パンツの方が6名いる。また夜間もポータブルトイレやトイレへの誘導を行い、出来るだけ失禁がないように心がけている。自立支援を重点的に行うことによって、運営のコスト面にも良い結果が生じている。	
44		便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	こまめに水分補給を行っている。利用者の排便状況を把握し、主治医と相談し対応している。食べ物や散歩など運動も働きかけている。		
45	(17)	入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	日中は1階の大浴場で入浴を楽しんで頂いている。また、個人の状態に合った入浴方法を行っている。2階ユニットでも入浴を行っている。季節により、菖蒲湯・ゆず湯等も楽しんで頂いている。	週3回午後から1階のスロープ式の大浴場で入浴している。銭湯に行く気分で楽しみにしている方もある。希望があれば同性介助を行っている。	
46		安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日中、利用者一人一人に応じて居室で休んで頂いている。消灯は基本21時だが、居室やフロアで過ごして頂き、好きな時間に睡眠出来るよう支援している。		
47		服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	処方されている薬の説明書を管理し、利用者の症状と処方されている薬の効能について理解している。利用者の服薬管理は職員が行っている。便秘薬は排泄チェック表を活用し、排便状況を把握する。状況に応じて主治医に相談し、用量を調節してもらっている。		
48		役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	日常生活で水やり・畑仕事・家事の役割を出来る範囲でして頂いている。散歩・買い物・ドライブ等の気分転換も行っている。毎月に行事、お誕生日会を企画し季節に応じて楽しんで頂いている。		
49	(18)	日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	利用者が希望する所に外出できるよう支援している。季節に名所などは行事に取り入れている。祭りなどは地域の方々や開催者の協力を得ている。また、家族による外出も支援している。天気が良い日には、近所のスーパーへ買い物へ行く機会を設けている。	個人記録に外出支援の実施を記録し、一人ひとり片寄りのない外出に配慮している。地域の祭りや季節の行事に出かけ、グループホーム協会の文化祭にも参加し賞をもらったこともある。近隣店舗へ買い物に行ったり、菜園係を決め水やりや草引き、収穫など出来るだけ興味のあることで屋外に出る支援をしている。	



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	普段はお金のトラブル防止の為、お金は持たないようにして頂いているが、買い物や行事に出かけた際には利用者にお金を渡して支払いをして頂いている。		
51		電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	利用者の希望に応じて、家族等への電話や手紙のやり取り等の要望があれば支援している。		
52	(19)	居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共用の空間は常に整理整頓・清潔を保ち、快適に生活出来るよう冬場は、室温・湿度管理にも努めている。また、混乱招くような刺激がないよう配慮している。ユニットも飾り付けは季節感を取り入れている。	グループホームは2階にあり採光も良く、居間にはソファが置かれ、本好きの利用者のために本棚も置かれている。長い廊下を利用し、歩行表の目標地点に風船やリンゴのシールを貼って楽しみながら目標に向かって歩行訓練が出来るように工夫し支援している。	
53		共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	各ユニットの扉は開放し自由に行き来できるようにしている。それにより一人になれたり、気の合った利用者同士が思い思いに過ごせるような居場所が確保されている。		
54	(20)	居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	施設の備品だけでなく、馴染みの家具や食器を持ち込んで頂いている。居室も利用者本人の好みに合わせて居心地の良い空間づくりに努めている。	洗面台とクローゼットが設置された居室にはテレビやテーブル、小ダンスなど使い慣れたものを持ち込み、手作りのカレンダーや習字の作品、家族の写真などを飾っている。和室が5室あり、カーペットを敷くなど使い易く工夫されている。	
55		一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	各ユニットのフロアーに、利用者と職員と一緒に作成したカレンダーを貼っている。トイレ・居室は識別できるように表示している。ひとりひとりの出来る事・わかる事を活かして安全かつできるだけ自立した生活が送れるよう工夫している。		